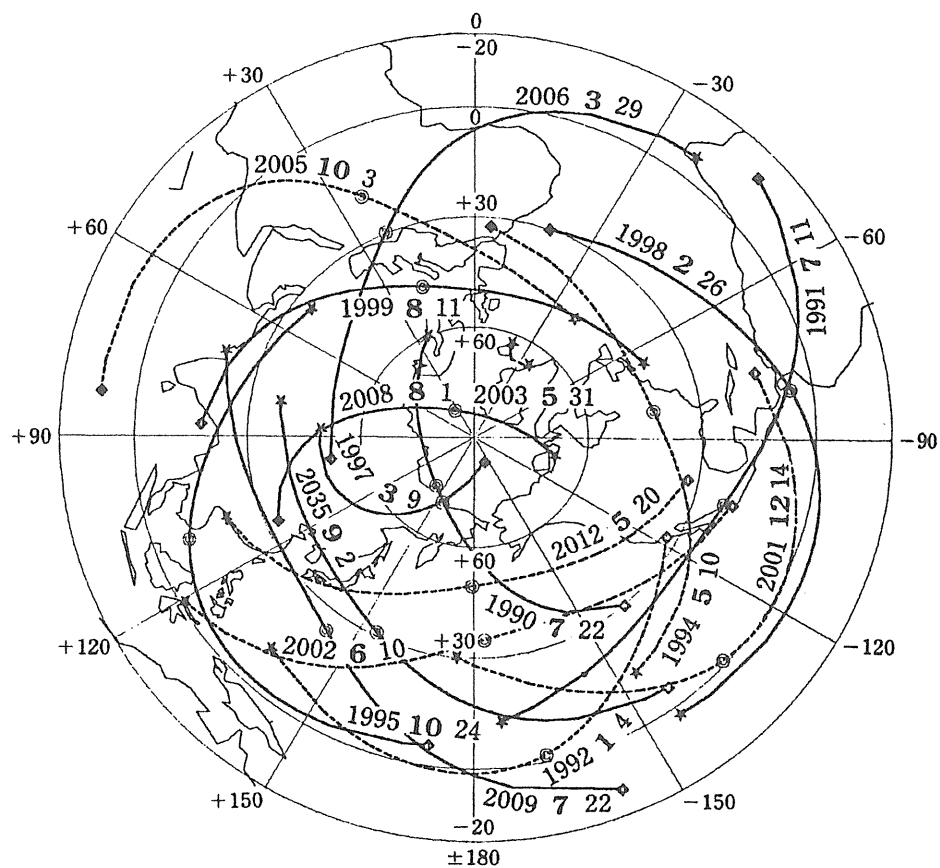




「理科年表」1995年より 日食中心線図

「青春法廷」その後

奥野善彦

「青春法廷」は、NHKのネットワークを通じて三度テレビで放映された。その都度全国の視聴者から、それは沢山の感想文がよせられた。とりわけ、再々放送となった7月21日は、メディアがNHK総合チャンネルで、しかも放送時間が午後9時30分から11時までのゴールデンタイムであっただけに、その反響はすこぶる大きいものがあった。NHKの担当者が「実に嬉しい」と手放しで喜んでいる姿を見て、わがことのように喜ばしく思った。

はからずも、この番組が、第21回放送文化基金賞ドキュメンタリー部門『本賞』（主催者財団法人放送文化基金）、1995年度ATP賞ノンフィクション部門『郵政大臣賞』および『優秀賞』（主催者全日本テレビ番組製作者連盟）、第32回ギャラクシー賞 テレビ部門選奨（ノミネート）（主催者放送批評懇談会）を受賞することになった。「このような輝かしい賞を、一つの番組で独占するようなことは、はじめてのことです。」とテレビの製作者が喜びの声をもらしていたが、放送界では大変評価されることであるらしい。

ここで、このテレビを見た視聴者から寄せられた感想文を若干披露して、『青春法廷』がどのような番組であったかを読者にわかってもらおうと思う。

1) 品川区、渡辺知明さん（専門学校講師）—東京新聞“反響”から—

「青春法廷・生命を問いかける学生（5月3日）」は、北里大学の法学ゼミの学生たちの真剣な議論に感動した。安楽死の裁判を実例として、学生たちが模擬法廷を実行するまでのドキュメンタリーだった。話し合いが進むに連れて、学生たちは被告人の心情や安楽死を取り巻く社会的な状況に目覚めていった。特に、被告人役の学生の法廷での発言は真に

迫っていた。これこそ本当の教育と思った。

2) 慶応義塾大学法学部法律学科三年、中島由理さんからのもの。

憲法記念日の夜、NHKで放送されました「青春法廷」をみて心をうたれましたので、みなさまに感謝の気持ちをお伝えたく思ってお手紙をだすことにいたしました。あの日の夜、何気なくラジオをつけたら、なにやら大学生らしい声で裁判について語っているのが聞こえてきました。そのまま聞いていると、法学部の学生らしくない意見がとびだしてきて、いったいこの学生なんだろうと気になり、テレビのスイッチを入れました。すると法学部ではなく、薬学・看護などの医学系の方々とわかり、そういえば私の通っている大学でも法医学の授業があったなどと思いました。夜遅かったこともあり、はじめは、ちょっと見てすぐ消そうと思っていました。でも見ているうちにみなさまの姿にどんどん引き込まれ、とうとう最後まで見てしまいました。私は将来、法曹関係の仕事をしたいと思っており、今、そのための勉強をしています。法律の知識が深まるにつれ、しだいに考え方も技巧的になり、ただ条文をあてはめるだけのパズルのようなことを繰り返しております。まるで、白か黒かを決めるゲームのようです。誰がかわいそうとか、誰を救ってあげたいのか具体的な価値判断をはさむ余地はいまの段階ではないようです。このような勉強をつづけていますと、理論ばかりで頭がいっぱいになり、人間のあたたかさが恋しくなっています。あの日の夜のみなさまの姿は、私の渇ききったのどを潤す水のようなでした。人が人を裁くことの是非、生命の尊さ、みなさまの涙や深い愛情を、こころにしっかり刻みつけて、法律を学んでいきたいと思います。

みなさまも、お体に気をつけて、愛情あふれる医療を実現なさってください。

実はこの手紙、港区白金のあて先で、宛名は「北里大学教養課程法学ゼミ御中」とあった。宛名の横に小さな美しい文字で“5月3日のNHKで放送された「青春法廷」をみて”と寄せ書きされた茶封筒に入って、大学のポストに投函されていた。

3) 東京都渋谷区、大桃京子さん、主婦62才、一朝日新聞、“はがき通信”からー

北里大学の模擬裁判「青春法廷・生命を問いかける学生たち（7月21日）」を見た。生と死の倫理を真摯に討論する学生たちの姿に感銘を受けた。時には泣きながら、若さが背負うには余りにも重大な問題に、毅然と立ち向かう医学生や看護学生。医療にかかわる方々の内省と他の人たちの再考を促す意義深い番組であった。

4) 千葉県、会社員 大友正昭 一読売新聞、“放送塔”からー

さわやかで深みのある内容だった。実際にあった安楽死裁判を題材に、若者たちが自分たちなりに裁判を組み立てて、争点に迫ろうという企画。生、死、愛、幸福などについて問い掛けていく若者たちに感動した。彼らの情熱と涙に、日本の将来の明るい光を見る思いがした。

放送局あるいは私宛に視聴者から届けられる感想文は、かなり長文のものが多く。その一つを取り上げて、与えられた紙数に余るものがあるので、ここに紹介できないのが残念である。その中の一つに「このような教育が、あちこちの理科系大学で行われておれば、オウムの青年科学者の悲劇もなかったろう。」、他の寄稿文で「私にも涙を流しながら正しいと思うことを真剣に訴えていた娘と何年か回り道をしてから医師になった息子がおります。私たち親の知らない所で、あのよう意見をもたかわせ、真実を求めて頑張っているのだと思います。」とあった。この二つの所感、何かとても感ずるところがあったの

であえて、その部分のみここに引用する失礼を投稿してくれた視聴者にお詫びしたい。

今、大学は研究機関であることはもとよりとしても、それ以上に教育機関であることが望まれる時代となってきた。大学の大衆化、放送大学の出現、生涯教育・社会人教育の場に大学の門戸を開放しよう等々、大学が教育機関として、より充実していくことが求められ、そのような運動は次第に高まりを増してきている。そのような社会の動きの中で、あの番組を“医療者に対する呼びかけ”との一面だけでとらえるものではなく、“大学教育のあり方”についても波紋を投げるものと感じてくれた人がいたなら極めて幸甚である。実は、南は九州大学や大分大学をはじめ、全国各地の大学から教材用にするための名目で「青春法廷」のビデオの借用があいついで申し込まれている。あの放送が、大学における教育のあり方について再考を求めるための一転機となることを願って、駄文を締めくくことにした。

(法学)

北里大学図書館共通利用カードを受け取っていない人へ

新しい図書館システム導入に伴い、図書館を利用する時には、「北里大学図書館共通利用カード」が必要です。相模原キャンパス4図書館共通のもので、まだ受け取りにきていない人は、教養図書館1階メインカウンターまで来て下さい。

医学部・医療衛生学部は医学図書館、理学部は理学図書館、看護学部は看護学部図書館カウンターで受け取って下さい。又、紛失してしまった人は、各所属の図書館カウンターで速やかに再発行手続を行って下さい。

丹沢桧洞丸のブナ林

坂田 剛

そう僕は歩いていった。すこしづつ、すこしづつ。進むたびにかわってゆく風景は、もう彼の視界には映らなくなっていた。ただ、一步一步踏みしめている地面がみえるのみ。もうどれくらい登ったんだろう？ 出発して、どれくらい経ったのだろう？ そんな考えが頭の中をよぎる。自分の肩に食い込む測器の重さと目の前の急な斜面を足全体に感じながら、一步一步進む。汗が次々と流れ落ち、乾いた地面に吸い込まれていった。もうだめだ、これ以上登れない。そう思った瞬間リーダーが言った「よし、一休みしよう」。

腰を下ろすと、それまで気がつかなかった鳥の鳴声や、ブナ林をぬけてゆく微かな風が心地良い。一口水を口に含んで、ようやく回りを見渡す余裕がうまれた。さっきまでは目に入らなかった緑が輝いている。こずえの間から靑空が覗く。ブナの森は本当に美しい。「よし、もう一頑張りだ」また、僕らは登り始めた。

丹沢の桧洞丸は標高約1600m。特別保護区に指定された地域にはブナ林が広がり、市民に身近な軽登山対象として親しまれています。春から夏にかけては頂上付近のブナ林床にバイケイソウやマルバダケブキが咲き誇り、ちょっとしたお花畑気分も味わえます。

しかしその頂上は今、姿を変えつつあるようです。巨大なブナが次々と立ち枯れ、後継木もあまり見当たりません。林が崩壊していつている様子は林道を歩くだけでもはっきりとわかります。桧洞丸頂上付近でのブナの立ち枯れの状況と原因を明らかにするために、我々の研究室ではいくつかの大学などと共同研究を行っています。そのデータは現在解析中ですが、おぼろげながらその様子がみえて

きています。

丹沢はその名前からもわかるように沢の多い山です。そして、その沢に流れる水は丹沢の豊富な降水量によって支えられています。いかに丹沢が降水量の多い湿った山なのかを示す良い例は、桧洞丸山頂付近に群生するバイケイソウでしょう。この植物は本来、沢の近くなど湿った所に生育する植物で、一般的に乾燥しやすい尾根筋や山頂付近ではまず見る事ができません。また、山頂にはサワグルミが1本あり、訪れる人に日陰を提供しています。これらの、湿った沢沿いなどに出現する植物たちが山頂付近や山頂そのもの(!)に生育していることは、丹沢がいかに湿った山なのかを如実に物語っています。また、雨ばかりでなく霧も頻繁に出ます。特に夕方から明け方の時間帯は霧が非常に出やすく、湿った環境が山頂付近にかたちづくられているのです。

この山頂付近に青ヶ岳山荘という山小屋があります。調査のたびにお世話になっているその御主人によると、20年ほど前はもっと雨や霧の多い湿った山だったそうです。なにしろ山小屋の布団を干そうにも、晴れた日が少なくて、とても干せない状態だった…それが、最近では空気が乾燥していて布団を干す必要がない程だ…とおっしゃるんです（布団を干すのが面倒なだけなんじゃ？…ないよね、きっと）。冬の様子も昔と変わってきたそうで、以前より積雪も随分減っているとのこと。つまり、ブナや湿った環境の好きな植物達が生育していた山頂付近の環境は以前とはすこしづつ変わってきて、だんだん乾燥してきているのかもしれない。

以前より乾燥してきたようだとは言っても、

まだまだ霧や雨が多いのは丹沢の天候の特徴でしょう。山小屋の御主人に霧（雲）の最も美しい場面を先日見せてもらいました。風のない夏の日の夕方、富士山は雲海の上に突き出した島になってしまいます。太陽がゆっくりと雲海の中に沈んでしまう頃、雲海はやおら上昇をはじめます。そしてついに尾根筋の最も低い場所を越えてしまうと…まるで巨大な湖があふれたかのように、雲の滝は勢いよく山腹を駆け降りてゆくのです。

これは、本当に息を飲む光景で、一同感激したのですが、実はこの霧が曲者だったようです。桧洞丸山頂付近の雨や霧は都市域と大差なく非常に汚れていることがわかって来ています（東邦大・慶応大の調査より）。霧の中に長時間いると目に少し違和感をおぼえる事すらあります。また、ブナ立ち枯れが広がり始めたのは、先述した雲の滝が流れ落ちる尾根の部分だったのです。長時間、汚れた霧にさらされる事が、ブナに何等かの障害を及ぼしているのかもしれません。

現在、我々はブナがさかんに（？）枯れている場所のブナと、比較的ブナの立ち枯れの起っていない場所のブナを生理生態学的に比較する事を試みています。まだ、ストレスを与えている具体的な環境や、光合成システムのどこが障害を受けるのかははっきりしませんが、桧洞丸山頂付近のブナの様子がすこしづつ明らかになってきています。どうやらそれは、山頂付近の狭い範囲でも生育地の違いによって大きく異なり、年によっても変化するダイナミックなものようです。

普段何気なくキャンパスから見えている丹沢ですがそこには立派なブナの林が、まだたくさん残っています。今度の週末、ちょっと行ってみませんか？

（生物）

『図書館の新しい利用について』

教養図書館では、今年の4月より、新しい図書館システム“LINUS/U”が稼働しました。このシステムは、現在、相模原キャンパスの4つの図書館の共通システムとして、医学図書館は7月から、看護図書館・理学図書館は準備中です。教養図書館は、図書データの遡及登録をしながらの稼働ですので、今まで通りに貸出票に記入していただく図書もあります。

また、各図書館の端末、もしくは、NetworkにつながったX端末から、OPACを用いて医学図書館、教養図書館の蔵書検索、貸出状況を調べることができます。（H7、11月現在）

この場合、telnetを使って、以下のように行います。

%telnet △ elib

（教養図書館は“elib”、医学図書館は“mlib”です）

↓

%login:opac

↓

select your terminal language.

1. SJIS 2. EUC 3. JIS 4. end

↓

1 ☐ （リターン）

LINUS/Uでの利用登録ですが、現在教職員（非常勤は随時受付）・H7年度新入生（留年生を含む）・医学・看護・医療衛生の学生全て、理学部は2年生まで登録が済んでいます。その他の方は、所属の図書館で申込をして下さい。

教養図書館では今後、インターネットへの接続も検討しています。

これからも、情報提供の場として、職員一同がんばりますので、よろしくお願いします。

松野

表紙の図は、『理科年表』1995年度版に掲載されている日食の表です。この表には、1989年から2009年の日食の起きる場所が示されています。2035年の皆既日食は日本本土で見られるので特に書き加えられているようです。現在では、この図のように日食の起こる場所と時刻は秒単位まで正確に計算することができます。しかし、暦のあまり精密でなかった時代には、しばしば誤った食の予報がだされました。広瀬秀雄著『暦』によると、平安時代末期より江戸初期までずっと使われた宣明^{せんめい}暦では、36年間に25回の日食を予報しましたが、その内5回は全然見えなかったそうです。ただ、日食の予報されている日は、お祓いのため宮中の仕事は休みになったので、予報が多い方を歓迎した者もいたのではないかと想像されます。内田正男著『こよみと天文・今昔』(丸善)によると、賀茂在信は慶長15年の暦に、8月15日に月食が有ると予報したのですが、月食は起こらず、將軍家康は“どうしたのだ”と作成者の賀茂在信に聞いたのだのですが要領をえず、ついに在信は免職されたそうです。宣明暦自体の不正確さの責任を取らされた在信は気の毒ですね。正確な食予報のため、江戸幕府は天文方の渋川春海に命じ、貞享^{じょうきやう}暦(1684)を作らせました。しかしこれも中国の元の時代の暦の焼き直しにすぎず、その後さらに改良されたにも関わらず、宝暦13年(1752)には、暦の予報にない部分日食が起きてしまったそうです。このような失敗の積み重ねが、幕府を常設の天文台の設置や、西洋天文学による暦の作成に向かわせました。特に將軍吉宗は、西洋天文学による暦の作成を熱心に進めようとしてしました。地動説と楕円

軌道の理論を使い、正確な食予報のできる天保暦(1844)が出来たのは幕末の天保年間になってからでした。これが現在、旧暦と呼ばれている暦です。

表紙の図のように、日本本土では、あと40年も待たなければ皆既日食が見られない(おそらく私は待ちきれない)と、明確に判っていることは多少さびしい気がします。しかし、世界地図上に描かれた線を見ながら、もしお金と時間に余裕ができて、この皆既日食を見に出かけたら、ダイヤモンドリングやコロナが見えるだろうか…など、その地の気候風土などあれこれ考えるのもまた楽しいものです。

(物理学)

冬休み中のお知らせ

冬期休暇中の貸出、閉館日等については下記のとおりです。

- 1) 長期貸出 12月11日(月)～
'96年1月9日(火)
冊数制限はありません。
(但し、雑誌は対象外です。)
- 2) 閉館時間 12月16日(土)～12月22日(金)
1月5日(金)～1月6日(土)
平 日 9時～17時
土曜日 9時～13時
1月8日(月)～
平 日 9時～19時
土曜日 9時～13時
- 3) 閉 館 12月25日(月)～1月4日(木)

閲覧ニュース76号

1995.12発行

北里大学教養図書館

発行責任者 手塚 甫

〒228 相模原市北里1-15-1

電話 (0427) 78-8005